

素

顔

拝

見

## My enjoyable experience in Japan



予防歯科学分野・特任教授  
Songpaisan, Yupin

My second working life started on October 3, 2011 at Niigata University Faculty of Dentistry as a Visiting Professor after my retirement from Faculty of Dentistry, Thammasat University in Thailand as an educator and researcher in oral epidemiology, preventive dentistry (dental caries) and dental public health. My term of reference until the end of March 2014 is to construct an international PhD curriculum in Global Oral Health Science under the guidance of Miyazaki Hideo Sensei, Ogawa Hiroshi Sensei, Ishida Yoko Sensei and Ogawa Yurina San.

It has been over a year now since I have been working here. So far my working and general life in Niigata has been very pleasant with generous and friendly assistances from my co-workers as well as faculty staff at the Department of Preventive Dentistry.

I acknowledge and congratulate Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences for

their initiatives in global oral health science education. I accepted this challenging task as I could confirm from my experiences that dental public health needs to be in a broader scope as global.

In global oral health science education training, the challenges are 1) re-orient oral health profession to global contexts, 2) re-educate oral health profession to be globally competent, 3) research in translation of oral health knowledge and technology applicable to global situation and 4) re-deliver oral health care to be affordable and accessible to global citizen. Accordingly, the global oral health science specialist should be competent in 1) oral epidemiology & biostatistics; 2) global oral health promotion and social & behavioral science; 3) global oral health communication & informatics system; 4) global oral health service system & workforce; 5) global oral health policy, management & quality control; 6) global research & development; and 7) translational research on oral health science & technology to global application. To congregate all the competent domains into operation, another four incorporated skills in systematic thinking, leadership, ethics & professionalism and cultural diversity are required. In addition, actual experiences in working

with population are required through three to six months extramural training in a developing country.

Japan has a stable economic status and is one of the few safe countries to live. People are generally optimistic and look on the bright side. Training and education in Japan are highly valued. The quest of professionalism and perfection are strong suitably to organize global oral health science education for providing affordable quality oral health care to global communities.

Through the following education and working background, I am trying my best working with Niigata University colleagues to blend Japanese strong points and international education approaches to the Niigata University Global Oral Health Science Education. First draft of the curriculum has completed. It was reviewed and commented by Niigata University Faculty of Dentistry Academic Committee. Last year (2012), the curriculum was presented for comments at two international meetings, the 10<sup>th</sup> Asian Academy of Preventive Dentistry in Mongolia (September) and the Global Public Health Conference in Sri Lanka (December). The international review will be done at the coming Niigata University International Symposium in Thailand in February 2013. Afterward, the second draft of the curriculum will be revised and reviewed.

My dentistry and public health education were completed from Mahidol University, Thailand in 1970 and 1971 respectively. Additionally, I obtained



postgraduate education and training in epidemiology (Master degree) from School of Hygiene and Public Health, The Johns Hopkins University, USA in 1975 and in Cariology and Community Dentistry (PhD) from Faculty of Odontology, Lund University (now is Malmö University), Sweden in 1994. For my career development, I involved in several Thailand National Dental Health Surveys, National Dental Health Planning and Evaluation, National Dental Health Manpower Planning as well as implementing several community dental programs in prevention of dental caries and endemic dental fluorosis. My international career expanded by working with international organizations such as Inter-country Centre for Oral Health in Collaboration with World Health Organization in Chiangmai, Thailand, World Health Organization (WHO), DANIDA, International Association for Dental Research (IADR), International Preventive Dentistry Community. My research pride was a cofounder of a minimum intervention approach for dental caries, namely Atraumatic Restorative Treatment (ART) which is widely recommended

for caries prevention in several countries and now further developed to be SMART properly for caries prevention in primary dentition in small children. Highlight of my education career was to apply a problem-based learning (PBL) approach in dental education at Thammasat University since it is very appropriate in solving the patient's oral health problem. In administration, domestically I was Director of Master of Public Health Program in Dental Public Health, Head of Epidemiology Department at Faculty of Dentistry, Mahidol University as well as Associate Dean and Dean at the Faculty of Dentistry, Thammasat University; internationally I was President of the South-east Asian Dental Research Association (IADR-SEA), a Board Member of the International Association of Dental Research (IADR). Furthermore, since 1983 to present, I have been appointed as a member of WHO Expert Panel in Oral Health serving WHO assignments in several occasions.

✧

口腔解剖学分野・特任助教

寺田典子

平成21年10月より、口腔解剖学分野にて研究をさせて頂いている寺田と申します。新潟に越してきてから3年半ほど経ち、やっと落ち着いてきた感じがします。

大学を卒業して早13年経ちますが、歯科医師として研究従事者として色々な経験をさせて頂きました。

大学卒業後は、ほとんどの同期が大学か病院に

所属する中、私は一般歯科診療所に研修医として働き始めました。研修医先は北海道で一番大手の歯科医院でした。若手の先生でも患者さんが40人/日、ベテランの先生になるとユニットを4、5台使って60人/日以上のお客さんを診ていました。治療に当たり、限りある時間の中で、診察、診断、治療をいかに迅速に的確に行っていくか、真摯に患者さんの話を聞き治療に当たっていくかを学びました。

研修医2年目は、他病院で顎変形症の手術も行う歯科診療所に勤めました。一般歯科だけでなく、顎変形症の手術を行うため、口腔外科手術を行う際の検査や診察も行いました。一般歯科では経験できない、外科手術という分野の大切さ、歯科麻酔の重要性を認識しました。

研修も終わり、歯科医師3年目の最初は、一般開業医の分院長をさせて頂きました。今までは、歯科医院があって、院長がいて、その中で歯科治療をし、色々な勉強をしてきました。しかし、分院を任されることで、歯科治療、勉強だけではなく、トップという責任、歯科診療という運営がスタッフの生活を大きく左右してしまう可能性があるということを感じました。開業とは、患者さんの治療をする責任、自分の生活だけでなく、スタッフ達の生活もかかっているという責任、色々な責任を持って臨まなくてはならないものであると思いました。

次の所属場所は、北海道大学第一口腔外科(現：口腔診断内科学教室)です。大学なので沢山の歯科医師がいること、医師との連携で治療を行うこと、一般開業医から多くの紹介患者が来ること、学生の指導を行うこと、学会への参加など、何もかもが目新しく、非常に興味深かったです。特に印象に残っているのは、病棟勤務と歯科麻酔研修でした。生と死が目の前にあり、自分ではどうすることもできない無力さを思い知らされました。また、コミュニケーション、他愛のないおしゃべりでも、患者さんにとってどれほど大切か、先生というものがどれほど必要とされているか身をもって分かりました。学生時代から患者さんのことを思って歯科医業に従事するよう努めよう、と思っていましたが、この頃からより強く、常に「患

者さんのために」をモットーに働きました。

その後、御縁あって新潟大学口腔解剖学教室にて、上皮細胞を用いた研究に従事させて頂き、今に至っております。現在は、直接患者さんの治療を行うことはありませんが、研究を通して「患者さんのために」なることを常に考え、研究を行っています。

私は、13年間の歯科医師生活の中で、色々な大学、病院、診療所で診療、研究をさせて頂きました。根無し草のように生きてきていましたが、それでも一貫して変わらなかったのは「患者さんのために」ということです。

「患者さんのため」というのは歯科医師にとって至って普通です。しかし、その普通が当たり前になって言葉の意味の重さを感じなくなってしまったら、その時は患者さんのことを思っていないことになると思います。“常に”「患者さんのために」を思い、いつも新たな気持ちであれば、所変わっても、仕事内容、業務形態が変わっても、芯に変わらない思いがあれば、前に進んで行けると思っています。

これが、私の「素顔」です。

拙文にて、失礼いたしました。



\*

医歯学総合病院・歯科総合診療部・助教

奥村 暢 旦

平成24年7月より歯科総合診療部助教を拝命いたしました奥村暢旦です。せっかくの機会ですので日頃お目にかかれぬ方々に自己紹介するチャ

ンスだと思いましたので、乱文乱筆ですが御了承下さい。

私は昭和55年8月奥村家二人兄弟の次男として新潟県西山町で生まれました。二人目は女の子を熱望していた両親は生まれたのが男の子で相当焦ったことが予想され、「展朗（のぶあき）」と名付けてくれたのですが、数年後知り合いに姓名判断をしていただいたところ、画数的には気を遣うと「下の上」気を遣わないととても言えないと判定していただき、紆余曲折ありまして現在の「暢旦（のぶあき）」という漢字に大学受験前に戸籍上も変更いたしました。画数が改善されたことでその後の人生が劇的にかわったかという未だ「中」を出していない気もしなくはないですが、大器晩成を信じて90歳くらいまで「上」を目指してがんばろうと思います。これからお子さんが生まれる予定のみなさん、御存知かとは思いますが画数は大切ですよ。

さて、私の生まれた西山町は市町村合併で現在は柏崎市になりましたが、今も昔も変わらず自然豊かな所です。新潟県の西山町というと、年配の方には故田中角栄元首相の地元といった方がなじみ深いかもかもしれません。したがって地域の子供達はみな物心がつくと、身近に溢れる自然の海や山を駆け回って遊び、そして尊敬の念を込めて田中元首相の口癖「ま～、その～」をまねたものです（←実際にお会いした際に絶対にふらないで下さいね、今できるという意味ではありません）。この西山町、新潟県でも有数の豪雪地帯で、当時真冬は積雪で二階からしか出入りできないなんてことは日常茶飯事でした。こうした新潟特有の雪とほとんど太陽のでない冬空のもとで過ごさせるのは、成長期の子供達にはあまりにもかわいそうだと母は思ったらしく、私が小学校に入学する前に父の地元である群馬県の前橋市に引越しました。この前橋市は都会でも田舎でもない何とも表現しにくい所なのですが、母が求めた青空だけは1年を通して十分すぎるほどありましたので、おかげさまで私も小・中・高とその生活のほとんどをサッカーにかたむけすくすくと成長いたしました。

そして大学受験の時期が訪れ、諸般の事情があり新潟大学歯学部を受験すると言った私に、母か

らの親心を踏みにじるのかという無言のプレッシャーはあったようですが気付かないふりをして、晴れて平成11年4月新潟大学歯学部に入學という形で新潟に戻ってまいりました。それからはや十数年、こんなに長く新潟にいることに私自身が最も驚いております。ただ、「なぜこんなにも長く新潟にいることになったのか?」、その問いに対する答えははっきりと出ております。それはもちろんすばらしい方々との出会いがあったからです。

学生時代には先輩・後輩そしてなにより同期のメンバーに恵まれました。現在同期で大学に残っているのは秋田弁を操るイケメン<sup>1)</sup>をはじめ数名になってしまいましたが、それぞれの専門分野での仕事ぶりに常に刺激を受けておりますし、全国各地で活躍する同期のメンバーと再会できるのは年に1、2回と決して多くはありませんが、会う度に彼らの成長を目の当たりにすると大変な刺激を受けます。徐々にそれぞれ責任ある立場になりつつある一方で、会えばすぐに学生時代のままだらないことで笑い合える彼らとは、これからも一生の付き合いをしていきたいと強く思っております。

もう一つの出会いは部活を通しての出会いです。小中高とサッカーに没頭していたことは前述の通りですが、なかでも高校が男子校だったため、平日はもちろん休日のほとんども部活で男に囲まれる生活は、おそらく皆さんの想像を絶しており、その反動からか「Jリーガーになれないのなら大学ではサッカーではなく、キャンパスライフを満喫できるスポーツ、そうだとテニスサークルにしよう」と心に密かに秘めて大学に入學いたしました。ところが自分からサッカー経験者であると公言したつもりはないのですが、どこからかその情報が漏洩したらしく、いつのまにかサッカー部に入部しており、結局気が付けば主将を任せただけのほど没頭いたしました。サッカー好きなチームメイトと過ごした6年間は、先輩後輩を越えた付き合いをさせていただき、その関係は卒業後も高木教授をはじめとしたOBによる後援会を通じて続いております。特に昨年は創部40周年記念事業として鳥屋野運動公園でサッカー大会を開催いたしました。ロンドン五輪の熱狂さめやらぬ猛暑

の中、熱中症対策と傍らにAEDを常備するという健康を最優先した状態でスタートしましたが、始まってみればTeam Ritsuo（顎顔面外科高木教授中心のチーム）VS Isao Japan（矯正科 齋藤教授中心のチーム）で大変盛り上がり、参加した全員が翌日以降の筋肉痛のことは忘れてボールを追いかけておりました。私も10年後・20年後も諸先輩方のように、現役さながらのプレーを続けていきたいですし、現役部員をはじめ後輩の活躍を温かく見守っていただけたらと思っております。

最後のすばらしい出会いは、卒業してから今日まで歯科医師として歩み始めた私に対し、大学院生時代に真理を追究する意味とその術を御指導いただいた先生方、常に患者様のために努力を惜しまず最善の臨床を目指すことを教えていただいた先生方、そして切磋琢磨しながら同じ方向をみて日々共に臨床させていただいている先生方・みなさんとの出会いです。現在私が所属している歯科総合診療部は、御存知の通り藤井教授のもとで、若く希望に溢れた歯科医師が、臨床研修を通じて自分の歩むべき方向を模索しながら研鑽する場所です。私とその限られた臨床研修期間中に彼らに教えられることは決して多くはないと思いますが、歯学部に入學してからの皆さんとのすばらしい出会いを通していただいた刺激を、若い彼らに少しでも伝えられるよう、私自身も日々成長しながら努力していきたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

#### 参考文献

- 1) 三上俊彦, 素顔拝見, 歯学部ニュース 2011(2); 120: 70-71.



小 松 康 高

2009年4月から歯周科・助教として勤務しています、小松と申します。今回、「素顔拝見」の原稿依頼がありましたので簡単に自己紹介させていただきます。全くの「初診」でなく、「4年予後」なので、鮮度は落ちますが、少しでもお付き合い頂ければ幸いです。

生れは神奈川県横浜市、2歳の時に父の地元の福島県いわき市に引っ越し、そのまま高校まで在住。私の地元の福島県いわき市は太平洋側に面した東北最南端、茨城県との県境に位置する人口35万程の中核市です。夏は浜風が優しくそよぎ、涼しく、一方、冬は東北にもかかわらず、ほとんど雪が降らない非常に温暖な気候で、住みやすいところ。スパリゾートハワイアンズ（以前の呼び名だと、常磐ハワイアンセンター）のある所と言えば、大概の人に分かってもらえます。そして、新潟大学歯学部に入學、学生時代は、バドミントン部に所属していました。1年生から5年生まで、毎年必ずデンタルには参加しましたが、通算成績は確か1勝5敗、ガットは一度も張り替えることはありませんでした（笑）。その後、歯周診断・再建顎分野の大学院、医員を経て現在に至ります。

なぜ、歯周科を選択したのか？ ですが、5年生のポリクリの時に見学した、上顎6前歯の歯冠長延長手術が僕の中で大きなきっかけとなりました。当時、オペの細かい意味合いなどは分からないとして、とにかく純粋に「凄い!」と感じたのです。6年生の臨床実習でも、その先生が私たち31期生の歯周科担当だったのですが、同級生がその患者様を担当させて頂いた関係もあり、オペの後の同部位のセラミックによる審美的歯周補綴治療についても、情報を得ることができました。その一連の「歯周分野の専門性を生かした高度な総合力」に感動を覚え、軟組織・硬組織をマネジメントでき、一口腔単位で総合力を学ぶにはと考え、歯周科を選択したのです。

一度きりの人生、仕事も含めて、どうせなら好きな事に専念し、楽しく過ごしたいものです。何

に対しても、一つの物事に向かう時、まずは「興味」を持てるかどうかだと思っております。歯周分野の学問に「AIDMAの法則」というものがあります。これは、患者様のモチベーション向上の方策を考える際に参考にするものなのですが、一種の行動心理学的なものでもあり、ヒトが「行動の変革」を起こす時の過程とされ、以下の階段を一段ずつ登り達成するとされています。A=Attention(気付き)→I=Interest(興味)→D=Desire(欲求)→M=Memory(記憶)→A=Action(行動)。これは、ペリオだけでなく、一般論にも当てはまり、行動を起こす時の第一歩は、やはり【気付き、感じる】ことなのです。ID野球で名をはせた野村監督もメディアで同じ事を言っていました。私の父は、私に、塾に行くことは決して勧めず、逆に習い事に行くことを勧めてくれました。感性を養う、磨くことに繋がったか分かりませんが、私には色々と趣味があります。そして、自分の性格上、一旦興味を覚え、好きになってしまうと、とことんのめり込んでしまいます。逆に興味のない事には、本当に無関心といった不器用な性格で、自己でも重々自覚しています。車のチューニングやドライブ、日本の城(跡)巡り、音楽が好きです。音楽に関しては、学生の時に、同期から借りて覚えたヘヴィメタル・ハードロックにはまってしまい、今に至ります。ここ5年位ライブには行っていませんし、新しいバンドの開拓もめっきり最近していないのですが、心をなくし、ヘコタレそうな時は自分を発奮、勇気付けてくれる良い代物です。美辞麗句を並べただけの音楽でなく、人間の喜怒哀楽がそのまま投影されている人間臭い全身全霊からなる産物で、その泥臭さがまた良いのです。ヘビメタの三要素[①パワー ②スピード ③メロディ]全てにおいてバランスの取れている(やや③に傾倒しているとの批評も雑誌に多々ありますが)、北欧に多い「ネオクラシカル」が私のお気に入り、フィンランドのSTRATOVARIUSは最もお気に入りのバンドです。一方、真逆かもしれませんが、クラシック、特にショパンのピアノ曲も好きです。

最後に、昨年9月～11月末までの3ヶ月間、スイス・ベルン大学に短期留学させて頂きましたの

で、感想を少々。言うに及ばず、歯周分野の学問的に非常に勉強になったのですが、同時に自分の人生観や価値観を顧みる良い機会となり、世界観が変わりました。あちらの人は良い意味で、とても「自分本位」だと強く感じました。若いうちから自分の人生設計が明確で、一度きりの人生、仕事もプライベートも自分のやりたい事に全力で打ち込みます。また、自分の仕事に強い誇りと信念を持って臨んでいて、また立場は違えど、Dr.や衛生士、基礎講座のDr.など、皆が互いを尊重し、自分の専門分野の能力が最大限発揮できるような環境にあることも強く感じました。自分より若いDr.が学問的にも技術的にも物凄く勉強しているのに非常に発奮させられました。また、観光にも少々行きましたが、スイスと言えばハイジの世界、4,000m級のアルプスと氷河、牧草地の雄大な景観、とくに名峰ユングフラウ、マッターホルンを間近に見られたことは感動的でした。また、旧市街地の散策も中世のヨーロッパを肌で感じられ、建築物の緻密な彫刻、教会や大聖堂内部の絢爛豪

華な天井壁画や装飾には感動しました。

最後に、治療技術や学問的知識の向上のみならず、人間的な幅を広げて、自分が学生の時に得た様な感動を、患者様や学生、後輩の先生方に与えられるよう、これからも日々精進したいと考えています。今後とも、宜しくお願い致します。



スイス・ユングフラウヨッホにて

